

向山 直佑 (Mukoyama Naosuke)

2019~2020 年度奨学生

オックスフォード大学 政治国際関係学部 博士課程

1. 世界は狭くなり、そして広くなった

オックスフォードに進学する以前と現在とを引き比べると、もはや全く別の時代であるかのように思われる。それくらい、彼の地で過ごした 3 年半は、私にとって大きな意味を持っている。オックスフォードなどという仰々しい大学に行って、今でこそ「国際派」のように見えているかもしれない私が、大学入学まで、留学はおろか、海外旅行の経験すら無に等しかった。唯一の例外は 3 歳の頃に 1 年弱住んでいたスコットランドであるが、3 歳の記憶などあるはずもなく、また現在私が英語を話せるのはこの頃の経験のおかげでもない（もしそうであれば、私は今頃スコットランド英語を話しているはずである）。だが、「広い世界を見たい」という渴望は、高校生の時から私の中に強く息づいており、この渴望を満たすために大学生活の大半を捧げてきたといつても過言ではない。大学で国際政治学という分野を専門に選んだのも、あるいはそうした動機によるものかもしれない。交換留学や諸々のプログラムへの参加を経て、そのいわば集大成ともいえる体験が、オックスフォードへの留学であった。

私の所属する St. Antony's というカレッジが特別国際的である、という理由はあるにせよ、オックスフォードという大学は、少なくとも大学院レベルにおいては極めて多様性の高い、刺激に満ちた空間であった。高校あるいは大学で、自分と似たバックグラ

ウンドの人々と築いていたのと同等か、あるいはそれ以上の交友関係を、異なるバックグラウンドの人とも築くことができるというのは、頭では理解していたものの実感として新鮮な驚きであったし、様々な経験を経て、新しい環境に移動することのハードルは、格段に下がった。世界は狭くなり、国境は私の中でさして大きな意味を持たないものになった。

もちろんこうした境地に至るまでの過程が、平坦であるはずはない。博士課程の同期が私以外は全員イギリスで修士号あるいは学士号を取得した経験があり、大半がヨーロッパ・アメリカ人であるという環境で、言語的なハンデを克服して自らの研究の有用性をアピールするのは大変なことであったし、日本と違って万事適当な大学事務(その分フレキシブルという利点はあったが)に振り回されてストレスが溜まったことも一度や二度ではなかった。ただ思うのは、(現在の私もこの点において大きな違いはないのだが、) 諸々の壁にぶつかりつつ、実績を積み上げていく期間が、結局は一番充実しているのではないかということである。何かを達成した途端、それが急にどうでもいいようなものに思えてしまうということはよくあるが、オックスフォードでの生活が私にとって充実したものに感じられるのは、壁にぶち当たりつつもそれを何とか克服していく過程の楽しさによるものが大きいのかもしれない。

私の中で低くなった「国境」というハード

ルが、再び格段に高いものへと変貌してしまったのは、2020 年に始まったパンデミックという不可抗力のためであるが、一方で、自分の視野が広くなつて世界が狭く感じられるという変化は、逆説的に世界の広さを感じることとも表裏一体であった。新しいことを知るということは、同時に自分がどれだけ物を知らなかつたか、ということを実感する営みでもあり、さらにはまだ自分が知らない世界へと思いを馳せるきっかけにもなる。知れば知るほど、知らないことが出てくる。また、オックスフォードは多様な空間ではあるが、そこに含まれていないさらなる多様性、ということについても考えるようになった。例えばオックスフォードにはシンガポール人はいても、ベトナム人やインドネシア人はほとんどいない。チリ人は時々見かけるが、ボリビア人は見たことがない。また出身国やエスニシティといった面では多様な学生たちも、社会経済的バックグラウンドという面では似たりよつたりである。そこにあるものを見ると、同時にそこにはないものを想像する大切さに改めて気付かされたのも、またこの 3 年半の収穫と言えるのかもしれない。

2. 奨学生期間中にできたこと・将来計画

オックスフォードでの博士課程を振り返ってみれば、学問的な面では、概ね当初の目標を達成できたのではないかと思う。博士論文は（パンデミックの「おかげ」で）予定よりも半年早く完成したし、高い評価も得ることができた。英語での査読論文出版もできだし、国際学会での発表も何度か経験し、学会賞も受賞した。ティーチングもある程度経験でき、また学内で研究グループを主

催するという得難い経験もした。もちろん、「もっとできたのでは」という思いは常に付きまとうが、これで十分だと言わないと自分に失礼なように思う。

将来計画について、坂口財団への応募時点では私はこのように書いている。「博士課程の研究を通じて自らの専門性を確立した後、英語圏の大学で研究職につき、国際誌・国際学会に研究を発表して、国際的な学界の一員となることをまず目標とする。ポスドク、Assistant Professor、そして Associate Professor の期間計 10 年前後をこれにあてる予定でいる。」とりあえず、今後 2 年間ケンブリッジ大学でポスドクをすることが決まっているので、現時点ではこの計画に沿うことになるが、「日本に帰るか」という問題と、「帰るとしていつ帰るか」という問題については、正直に言って以前ほど確信はなくなつた。といっても、「帰るつもりがなくなった」と言っているわけではなく、来年には帰っているかもしれないし、何十年も帰らないかもしれないという意味で、分からなくなつたということである。例えば、申請書を書いていた当時、私は、自分は海外よりも日本で学生を教えることにより情熱を感じるであろう、と思っていた。しかし、実際にティーチングをオックスフォードで経験してみて、海外であっても日本であっても、特に感じ方に違いはないということが分かった。逆に、以前の私は日本に戻るということは不可逆的な変化であり、また研究環境としては「海外」の方が恵まれている、と思い込んでいた。しかしながら、別に再び海外に出ることが選択肢として排除されているわけではないし、イギリスの研究者を見ていて、彼らが必ずしも日本の大学教員（誰と比べるかにもよるが）と比べて

恵まれた研究環境を有しているわけでもないといふことも分かった。また、生活面でも、自分はやはり日本で暮らしたい、と思うこともあるれば、イギリスあるいは他の外国で暮らしている方が居心地が良い、感じることもある。研究者としての業績を積んで地位を確立し、研究を通じて社会に貢献するという目標について変化はないものの、それをどこで実現したいかについては、アンビバレンスが深まったという他はない。

私が 2 年後、5 年後、10 年後どこにいるかは私にもわからないが、温かく見守って頂ければ幸いである。末筆ながら、この 1 年半支援をしてくださった財団の皆様、また寄付金出資者の皆様に心よりの感謝を申し上げて、最終レポートとさせて頂きたい。

以上